

3月27日には、旗岡景吾<本多俊次>、久納、野毛九郎<木下勇>、武田亜公、大江賢次らによって、日本プロレタリア作家同盟<ナルプ>神奈川支部が創立され、機関紙部長千田光治<千代田愛三>の手で、『文学突撃隊』<月刊、ガリ版100ページ前後>が発行された。

運動は、「サークルを職場に、地域に！」のローガンでひろげられた。『文学新聞』13号には、神奈川通信員から、「俺たち百貨店に働く者の苦しさは口にいえぬ。……従業員総数450人、この中で25才以下は男女合せて250人位だ。この中に俺たちの文学サークルを作った。いまの処、男10人、婦人10人。第1回会合の時には作同横浜支部から1人、P・P<プロレタリア美術同盟>から1人出席してもらってプロレタリア美術の話があり、皆ひじょうに感心してきいた。第2回にはもっともっと大ぜい集るようになっていっている」という通信がのっている。これらの通信員の中から、作家同盟の同盟員が推せんされていった。昭和7年に前後する数年間、県内各地でまかれたビラ、ポスター、パンフレットの現存するものは、孔版とはいえ、「芸術」的な高さをもっているものが多い。全協の集団執筆による『再建後の左翼労働組合運動』<富呂波巖太著、労農書房、昭和6年9月刊>は、幾多の実例にもとづき、「戦闘的労働者は工場内で如何に戦うべきか」について、11項目をあげているが、「分会ニュースの発行」「研究会の組織」「赤色スポーツの問題」をとりあげ、「補助組織の問題」では、「文化団体、娯楽機関」が「現にあるだろうし、又造って行ける」「闘争場裡のプロレタリアートを組織するだけでなく、労働者の自由な時間をも組織し、之に政治的意義を持たして行かねばならない」と指摘、簡易印刷器の製法まで紹介している。こうした、実践的な著書の類が、昭和5年秋以降は、数多く発行されるようになったことが、労働者の自主

的、大衆的な組織、活動を援助していった。

「神奈川三月 <みつぎ>」の言葉どおり、これらの活動家たちは、地下の活動すら、3カ月と続けることができなかつた。検束、検挙、投獄。あるいは煙突男、田辺潔のように虐殺されたものもあった。昭和8年6月7日の佐野、鍋山の転向声明が、運動の退潮のメルクマールとなった。プロレタリア文化人たちは、組織を失い、ハダカのまま寒風に吹きさらされた。舟方の今日まで愛唱される「ふるさとへの歌」は、「赤銅色のこのからだに はらわたに 斗いへの道わ揺れ 気もちわうきしずみ 仕事のあてわぬいこのごろ せめてわむかしの思い出にひたる時……川よ 隅田川よ ふるさとよ なかまらよ その日のために そのために おもいをかため ほりさげて 『いばらの道』をふみしめぬこう 今日のくらさのなかに生きぬこう」とうたいあげ、私たちに切々と迫ってくる。

中日戦争は、果しなく拡大していった。昭和10年、第16回メーデーは「非常時に淋しく抹殺された、浜メーデー、参加者と警官同数」と新聞に報じられた。昭和12年7月18日、久保山療養所で1人のタイピストが死んだ。夫松永浩介は、妻根岸春恵の遺稿を集めて、『タイピストの日記』を発行した。「振り落せ！ 旧き木の葉 寒風に抗して 春を待つもの」と根岸は歌った。

ハダカになった労働者は、生活を守って闘わざるを得なかつた。昭和12年、京浜の労働者は、戦前最高の参加人員で、争議をくりひろげ、「戦時体制」に抵抗していた。短歌は「悲しき玩具」ではなくなり、新しい闘いの武器としてとりあげられた。内務省警保局の秘密文書は、

「神奈川県に於ける旧作同分子渡辺多実男、小山宗、佐藤吉之助外数名にありては、昭和12年1月頃……「短歌評論横浜支部」を結成し……翌昭和13年1月……非転向分子高橋政次加盟するや活動

漸次活発化するに至れり。更に昭和14年1月に至り大森平削コト高橋豊二の加盟するや支部活動の性格を批判検討したる結果、従来の支部活動が相当期間運動しつつあるにも不拘、組織の拡大を期し得ざるは構成分子が小市民生活者のみなる関係上其の接触面が限定さるる為なりとし、従って広汎なるメンバーの獲得と組織の拡大強化を図る為には工場労働者を主要目標に、運動を展開することこそ当面の重要な任務なりとの結論に達し、昭和14年5月重要工場地帯たる川崎を中心に工場労働者を主要目標として「京浜短歌会」を結成するに至れり。」

と内偵結果を報告しており、昭和16年夏には、佐伯鉄工所の産業報国会機関誌が発行され、舟方一、久納頭、岩崎キミらの手で労働者との結びつきが深められたことも、彼らの注目するところとなっていた。昭和16年12月8日を期して、全国のプロレタリア文化人が根こそぎ検挙され、暗い谷間に入った。

5

敗戦によって、帝国主義日本は崩壊した。労働組合も、支化運動も、いっせいに再建され、昭和21年には、戦前水準を突破していった。用紙難のなかを、労働者はピラをつくり、新聞を発行し、演説をしてあるいた。労働者の自主的な、大衆的な「読み」「書き」「話す」能力は急速に高められていった。

『新日本文学』『勤労者文学』『文学サークル』などの中央機関紙はもとより、『市従文化』〈横浜市従〉、『日産文芸』〈日産自動車〉などの労組機関紙誌を通じて、労働者出身の文学、文化の専門家が生れていった。

だが、前戦のプロレタリア文化運動の遺産すら十分に汲みつくさないうちに、占領軍の検閲が強化

された。機関紙に真実を報じてピストルでおどされた編集者まであった。昭和25年の朝鮮戦争は、解放感を一挙に粉碎した。再び非公然機関紙が、工場内でも作られるようになり、文化活動が文工隊活動に狭められてしまう傾向すらあらわれた。そのなかで、昭和28年、日産争議での詩集『工場防衛』が、また「日本のうたごえ」の開催が、新しいプロレタリア文化運動の到来を予測させた。昭和29年、近江絹糸の人権争議は、「らくがき」運動という、これまでにない形で、労働者の「読み」「書き」「話す」能力を組織し、全国にひろがっていった。

安保闘争の昂揚期までの5年間、京浜の労働者たちは、組合機関紙の大衆的編集、職場新聞の発行、という形で、みずからの文化能力を高めていった。安保のプラカード、ピラ、パンフレット、文化集会は、こうしたなかで創意をこらすものとなった。新安保成立の昭和36年後半以来、全国的に労働運動は退潮を見せ、「挫折」ムードが、文化運動をとらえていったとき、神奈川県労働者は、一貫して闘いの努力をやめなかった。

統計によれば、昭和37年、若干の低下を見せたくそれとて、安保の前年、昭和34年以前の最高参加人員を超える。県下の争議参加状況は、38年には戦後最高となり、毎年その記録を更新しており、拠点としての役割を十分に果しているといえよう。残念ながら、既存の労働組合のもつ、こうした戦闘性にもかかわらず、県内労働者の組織率は、年々流入する労働力人口の大半を未組織として残しており、推計50%以下にとどまっている。もちろん、全国平均をはるかに突破するが。この基本的弱点は、プロレタリア文化運動全般にも、芸協その他の分裂策動と相まって、一定の困難を生んでいることは否めない。そのなかで、京浜を中心に、労働者の文化運動について、注目すべき、二つの現象が昨年来、一定の影響をもちつ

つある。一つは、個人加盟の産業別単一労組という組織論とその具体化である。この方式は、すでに全日自労、神奈川一般労組、神奈川自動車交通労組等において試みられたものであり、明らかに戦前の戦闘的労働組合の系譜をもっている。未職織労働者の圧倒的存在と流動性を特色とする中小企業の分野で、広汎な労働者を結集していくのにふさわしい組織形態であり、そこでは、再び「読み」「書き」「話す」能力の育成が中心にすえられている。一方、既存の労働組合においても、前述の新型労組にあっては、結成の当初から、新しい『職場新聞』の編集、発行体制が各所で組織されつつある。これらの一職場一新聞、機関紙中心の組織づくりのスローガンですすめられている自主的大衆的な編集委員会は、一定の目標をかかげた、学習運動と結合することで、「読み手」を「書き手」に高めており、その成果は、県下に数百の日刊職場新聞となってあらわれている。これらの日刊紙は、私の知り得た限りでは、先進的労組が援助したものもあるが、大半は職場の平凡な労働者が、やむにやまれない気持から生み出したものであり、印刷も悪く、紙面もザラ紙4分の1大と小さい（時には手書きのものすらある）が、必要は文化を生む。労働者はこうして、新しいプロレタリア文化の創造に大衆的に参加しつつある。

いまは萌芽にしかすぎない、「職場新聞」の活動ではあるが、この結果、「受け手」の質が向上し、「受け手」が「送り手」を育て出すならば、戦前のプロレタリア文化運動の最盛期を思わせるような、“新人”の登場が続出するであろう。10年の沈黙を破って、この春、小沢清が『工場地帯』という、川崎のある電機工場を主要舞台とする長篇の第一部（100枚）を発表したのも、上げ潮が、ついそこまで来ているからであろう。混迷を続けていた専門文化人の団体も、ジャーナリズ

ムの「多元化論議」や、執拗な分裂運動にもかかわらず、再び活動を開始している。私たちは、こうした、労働者大衆の「文化水準」の高まりと結合した、専門文化人による優秀な活動の展開を待ち望んでいる。「横浜文化」といっても、実は、こうした「プロレタリア文化」と「ブルジョア文化」が激しくせり合っているのであり、政治、経済の変動が文化の面に及ぶのはジグザグであるが故に、抽象的に文化論が成立しているにすぎない。

今日、横浜市民の圧倒的部分は労働者、勤労市民であり、横浜文化は、この層から、新しい民族的な民主的な文化として、支持され、発展するものであることが期待される。荒畑寒村が指摘したように、「物質的基盤の上に、新しい文化がおこるに違いない。」横浜市当局が、この新文化の創造に、どれだけの寄与を行ない得るかということとは、形骸化した民主主義を基盤に、市民とはかけ離れた政策論議をすることではなく、無限のエネルギーを秘めている労働者、勤労市民の組織化を援助し、施設、器材を整え、労働者、勤労市民と共に、新しい都市づくりのプランの中に、文化の位置づけを行なっていくことではないだろうか。

<附記> 私の専攻は、戦前の神奈川県社会運動史であり、文化運動そのものはとくに学んだわけではない。従って、編者の期待する“都市社会学”的な“文化論”にはならなかった。きわめて単純化したメモとして、明治以来のプロレタリア文化運動を、労働運動の発展とのからみあいにとらえ、そこに新文化創造の可能性を探ってみたにすぎない。文中、現存の諸先輩に対しても歴史的呼称として敬称を略した。御諒恕賜りたいと思う。